

第23回 連続講演会 自然との共生：ブラジル弓場農場を実例として 概要と感想

第一回 2008/12/15

「弓場農場との出会い 三十年前の弓場農場」

講演会の概要（第一回）

ブラジルへの最初の移民は1908年であった。それから現在までにどのような歴史があったのか、日本ではほとんど情報がない。ブラジル移民史の研究者や研究機関もない。また、日本からは多少の資金援助がある程度で、他国からの移民に比べると支援は非常に少ない。それは日本文化の責任である。ほとんどの日本人が同質の文化圏で育ったため、異文化へ出ていくことに関心が薄く、実感が持てないからである。このように多数派優位の日本では、少数派になるブラジル移民のことは見捨てられ、忘れられていった。木村さんは舞台の台本を書く上で、なぜ日本はこのように多数派本意になってしまったのか？少数派としてどう生きるのか？少数派が見捨てられがちな状況をどのように克服すればいいのか？を心に留め、共同をテーマに作品を作り続けてきた。

木村さんが弓場農場と出会ったのは30年以上前、ブラジルから帰った日本人を作品に取り上げてからだ。弓場農場では移住当時の日本文化精神を大切に、45haの土地に80人が自給自足の生活を送っていた。農場収入は少ないが、芸術活動などを行いながら各自の価値観を尊重しながら生活しており、ブラジル人との共生も実現している。弓場農場は、個人の尊重の上に文化の多様性と共生することが可能であると、共生・共同の本質を教えてください。

講演会の感想（第一回）

■学生1

木村さんのお話を聞いて、今まで自分がいかに日本という狭い視野でしか周りを見れていなかったかに気付きました。日本は協調の精神があるといわれていますが、それも国内だけでは、世界的な問題が多く存在し国際協力が求められている現代社会では通用しないと感じました。

特に印象的だったことは、“持続可能は可能か、不可能か？”という木村さんの問いかけでした。利益を追求し、どこまでも合理化、効率化を求める資本主義が現在の経済大国の主な考え方である以上、“持続可能”を実現することは不可能でしょう。そのような中で、自然と共生しながら生き生きと生活しているユバの人たちがいるという事実はとても新鮮で、私たちが見習うべき要素がたくさんあるように思われました。

■学生2

第一回の木村快さんの講演会をお聞きして、自分の木村快さんがおっしゃっていた「日本人」なのだとなじめて実感しました。自分自身も日本の中で育ち、知らず知らずのうちに「日本」という考え方ですべての物事を捉えていたのだと感じました。ノーマライゼーションとか異文化共生などといっても、日本の中にいる限りでは、他の文化に触れる機会もほとんどなく、日本人に囲まれている私たちには実感のないことばであって、少し遠い話です。そのように異文化理解の苦手な日本人であるにも関わらず、ほかの文化を持つ人々とも上手に交流し、付き合っているユバ農業の人たちに対して関心を抱きました。ビデオで少し見た、ブラジルという地球の反対側にあるブラジルで日本が話され、それでもって歌がうたわれ、お芝居がなされているというのがとても不思議な気持ちになりました。

■学生3

私はブラジルに日系人がいることは知っていたが、三世までになっており「祖父母と孫とが会話ができない」という問題を抱えていることを初めて知った。家族間で会話ができないなんてとても悲しいことだと思う。確かに祖父母はブラジルに住む純粋な日本人、孫は日系とは呼ばれるものの生活はブラジル人であるわけで、言語や生活習慣の問題が生じるのはしょうがないのかもしれないけれど、何か対策が打てないものかと思った。

弓場の話も非常に興味深い話だった。日本人とは気質の異なる愉快的な人々が生活していながら、昔の日本人の精神などが残る地である弓場は面白い所だなどと思った。病人以外の人には何かしらの作業を行っているというのも、エネルギーである。また、障害者等の周囲の対応の仕方が日本人も見習わなくてはいけない点であると感じた。

また、日本人の弱点についてはかつての移住が始まった頃も、異文化がまじりあうブラジルという地に日本人が馴染めなかったという問題を引き起こしていたが、現在も国際交流の場面等で異文化と触れあう際に問題になりかねないなどと思った。特に「日本人が日本の文化を自覚していない」というのは特に印象に残っている。実際に、日本の文化を日本人以上に外国人の方が本質的に理解していることも多々ある。木村さんに日本人の弱点を挙げられて、ハッとした。異文化交流するために必要なことを日系人の話を聞くことによって得られたように思う。

第二回 2008/12/22

「弓場農場はなぜ生き残ったか アリアンサ移住地と弓場勇について」

講演会の概要（第二回）

アリアンサとは共生という意味である。弓場農場では「耕すこと、祈ること、芸術をすること」ができるのであれば、共同体の一員になることができる。芸術は演劇やバレエのほか合奏団などもある。これらの芸術は言語の継承にも一役買っている。

もともと芸術活動特にバレエは行われていたが、指導者がいなかった。しかし、ある時日本から元バレリーナが移住してきたことをきっかけにして、格段に技術が飛躍した。そこでホールを造るような計画が上がった。しかし、建設予定地にはコーヒーが植えられていた。本来ならばコーヒーという収入源を保つために切らないだろうが、弓場の人々は切ることにした。彼らの考えは「珈琲より人を作れ」であった。これは自立できる文化を創り出すということの根源であった。そのようにして発展していった弓場の文化＝芸術（バレエなど）は遠方への講演などを重ね、ブラジル連邦政府文化功労章を受章するに至った。弓場では毎年のクリスマスには集落内の劇場で公演を行う。バレエのほか演劇なども行う。これはいわば、日本でも行われていたような地域のお祭りなのである。

弓場にももちろん家族がある。しかし、多くの場合、部外者には分からない。それだけ集落がまとまっており、一つの大きな家族同然となっている。これができるのも他者を排除しない気風が「共生」を生んでいるのであろう。

講演会の感想（第二回）

■学生1

私は今回の講演会で3つのことにひどく感動した。

まず、「コーヒーより人を作れ」という言葉に感動した。農場として、コーヒー畑は大切な生産の場であるはずなのに、生産だけにこだわらず、アリアンサの人々の心満たすための芸術活動に村総動員で動ける姿勢はなかなかないものだと思う。しかも、発表のために1週間で作り上げたというのも驚いた。普段の生活の中で培われている、協調性や協力の精神の表れなのかなと感じた。

また、2つ目はアリアンサの地の人々が老若男女、何かしら仕事を持っているということに驚いた。若者が農作業などの力仕事を行い、老人が料理や掃除などの仕事を行って、みんなが自分の役割を自覚し、働くことができる生活は理想だと思った。また、若者たちが演劇などの講演や野球などの遠征に行ってしまったときは、農場の管理というのは老人たちであり、お互いに無理することなく支えあっている姿は、ユバの非常にいいところだと思う。

最後にアリアンサでいまだに日本語が使われているのにも驚かされた。もう、アリアンサ設立から73年も経つのに、いまだに日本語が使われており、しかも、アリアンサの文化で

ある芸術活動のバレエなどのダンスレッスンで体の感覚を覚えるために使われていると聞いて、今も日本人がブラジルの地で移住し努力していた証が見えるように思えた。

■学生2

今回の講演会のビデオを観て、弓場農場で生活する方はブラジルにありながら、日本語を話し、日本の文化が30年以上にもわたって継承されていることに驚きを感じた。

アリアンサでの合言葉は「コーヒーより人をつくれ」というもので、この言葉は自分たちの伝統を守りながら、ブラジル文化に共生できる人間を育成することを目的としている。そして、弓場農場では自分たちの伝統を守る方法として、「耕し、祈り、芸術すること」をモットーに置いており、それを実践することで、現在までの生活を守ってきた。

私が最も驚きを感じたのは、彼ら弓場農場方がいう共生とは、分かり合えるものだけが仲良く過ごす場ではなく、都合の悪いところの排除しないために、中には反対意見も含まれているものであるということ。私がそれまで考えていた共生とは、分かり合った人が仲良く過ごす場だと考えていた。彼らの共生の捉え方に驚きを感じると共に、この共生の考え方を持つことができたからブラジル文化の中で共生してこられたのだと感じた。

■学生3

アリアンサでの生き方には、自然の中で精いっぱい生きる姿勢がみられる。自然に感謝し、ただ生きることに感謝し、多くを望まない。ともに協力し合って生きていく。今の時代に本当に成り立っているのか、と思えるほど原始的で、素朴で、純粹に見える。今の日本に生きる私にとって、すごく異世界な感じがする。特殊、と木村さんがおっしゃっていたが、まさにその通りだと思った。

彼らの考え方には共感できる。自然の中で生きる私たち人間は自然に感謝しなければならないし、自然から多く搾取してはいけないと思う。けれど、その考えを完璧に保持することはできるのだろうか。確かに彼らはその地でそのようにして生きている。では、世界中すべての人がそのような生き方をできるかと言ったら、難しいことだと思う。そのような生き方をするには、私たちは近代社会に浸りすぎている。

彼らのような生き方はできない。けど、彼らのような考えを持ちながらいま私のいる社会で生きることはいないだろうか。近代的で物にあふれ、便利で快適なこの暮らしの中で自然に感謝し、共生の考えを持っている生きることはいないだろうか。自分達が食べる分だけでいい＝無駄な消費をなくす、共同の精神＝異文化を理解する、など。自分の生活の中で、彼らの考えが生きてくるのだと思う。それを、あと2回の講演の中で学んでいきたい。

第三回 2009/1/5

「共生のあり方を考える ブラジル移民史にみる異文化との共生」

講演会の概要（第三回）

なぜ弓場農場がブラジルの奥地に存在するのかは、日本力行会によるアリアンサ運動の活動歴史などを振り返ることで考えることができる。

最初に、日本力行会というのは明治に海外移住希望者の青年の教育と移住を支援する教育機関であり、この会員としてアリアンサの創設者の永田稔がいた。永田はのちに移民に詳しい輪湖と出会う。輪湖は、当時のあまりにも放置主義的な政策のために移民たちが結局排除されているという実情を知り、彼らの将来のためには医療や教育、産業のインフラを整備した「定住地建設」が必要と感じる。先住民からの差別を乗り越えるためには、彼らが文化的に自立していかなければならないことも、結論として挙げた。のちに輪湖は永田とともに青年呼び寄せという方法で移住地建設運動を行い、これがアリアンサ運動と呼ばれるようになるのだ。その運動で購入した移住地を、和親・協力という意味の「アリアンサ」と名付けた。文化的自立が目標だったことは、スポーツ推奨としての青年野球チームの存在からも理解できる。しかし日本の孤立で日本移民の激減・国策移住地への併合が起こり、最終的にアリアンサ運動は終焉してしまう。それからは共同や助け合いが失われつつあったが、弓場一党の道路無償補修により、村の再建が行われていったのである。ユバのモットーの「耕し、祈り、芸術する」や金銭的な自由は、混乱期にあったアリアンサが出会ったパルマ協同農場の影響を強く受けたものである。「来る者は拒まず、去る者は追わず、客人にはもてなしを」を受け継いでいるのだ。

講演会の感想（第三回）

■学生1

アリアンサのような移民村が生まれたのは、大正デモクラシーという時代の流れをくんだものだということが分かった。そこには、民主的な、自立的な生き方をしようという強い意志が感じられる。アリアンサの地で、協同しながら生きようとする姿勢が見られる。それがアリアンサの起源であり、基本となる考え方だと思う。移民そのものは国の政策であっても、そこには移民した人々の意思がきちんとあったのだと思う。アメリカから入ってきた近代思想やキリスト教の影響も強かったはずである。それを受け入れ、文化的に自立した集団、という目的があっても現在にいたっているというのがすごい。

ラトビアの農場の影響を受けたというのは、アリアンサが特別なのではないということをも物語っている。ラトビアの例があって、アリアンサでも弓場農場ができた。世界的に見れば弓場農場のようなものは決して珍しくないのかもしれない。現代の日本人の感覚から言うと異質で、特別なように感じるが、世界中にもアリアンサのような考え方をもつ人々が

いるのだということを実感した。

アリアンサのような共同社会が、長い歴史を経て今日まで続いているということが、すごいことだと思った。

■学生2

今回の講演会をお聞きして、ユバ農場の歴史の深さと複雑さを感じました。また前回、前々回の講演会でのユバ農場での考えや、行いのもとになっているのは他の国の移住地をもととしているのを知って、弓場勇の柔軟さを感じました。自分とはまったく違う他の文化を知ることは簡単ではあるけれども、受け入れて自分の中に取り入れることはとても難しいことだと思いました。自分か受け入れることによって相手にも受け入れられるということを感じました。

■学生3

大正期の日本人の思想は、今の思想（大雑把ではあるが）とは全然違うように思った。今の日本では考えられないような思想のもと、ブラジルへ渡ったのだと痛感した。

私の祖父は大正末生まれであるが、デモクラシーという思想はないように思える。つまり生まれたのは大正であるが育った環境が昭和の軍国主義の時代であったからであろう。身近にいる歴史を伝える人物が祖父母なので、日本の「過去」の姿が軍国主義で染まっている自分がいたのだと思う。

内村鑑三、吉野作蔵、美濃部達吉…どれも教科書で名前だけでも見たことある人物である。しかし、この時代の風潮というものを感ずることができなかった。今までは知識でしかなかったようだ。しかし、このアリアンサの話を知るとよりこれらの人物の偉大さがわかったようである。そして、なにより、このような思想を受け継ぎ今に伝えている所があるというのが驚くことである。しかも、90年ほど前は日本にあった思想がブラジルで残るとは。弓場勇の考えを日常生活の中で考える日本人は少ないであろう。

考えてみると、ESDは「新しい教育の価値観」という先入観があったが、実際は「過去」にも存在していたとともれるように思える。しかし、今の日本ではこの理念を実践することはおろか理解するのにも苦勞を要する。90年のタイムラグが大きな壁のようである。

第四回 2009/1/19

「討論 地球環境の転換期は生き方の転換期」

講演会の概要（第四回）

弓場農場への理解を深める手段として、その歴史文化を学ぶこと、もうひとつは独自の考えを持つリーダー・弓場勇という人物像を探ることがあげられる。

彼の家系は、曾祖父弓場五郎兵衛為政・長男才三郎・長女・勇・三男政吉である。政吉はカナダへ留学し、その後初の聖公会宣教師として日本に帰国する。兄才次郎も後にキリスト教へ改宗したこともあり、名家でありながら周囲は弓場家を異端なものとして見ていた。しかし弓場家に周囲の意見・反対（多数派）に立ち向かう勇気があったことは、生き方として尊敬すべき点である。どのような社会情勢であっても、自分の信念に生きることとそれを貫く強さはなかなか器と勇気がないとできないことだ。

慶応義塾に入った長男才次郎や、さらにカナダに留学した三男政吉などでもわかるように、弓場家は優秀な一家といえるが、次男である勇は勉学においては優秀ではなく、家族を失望させていた。しかし幼いころからガキ大将で、そのころからリーダーシップをとることを覚えていったのだ。そんな勇は、のちに海外留学（アメリカ移住希望青年の教育を目的としていたが、大正からブラジルへと変化した。）へ入学する。

そうしてアリアンサで活動を始めた勇は、協同農場を開いた理由として、“アリアンサの大原始林は異様な感動を覚える。これは人間の所有は許されない”という。彼は、無条件に土地の私的所有を拒否する姿勢をとっていたのだ。

講演会の感想（第四回）

■学生1

今回の講演会では全体のまとめのような感じであったが、ひとつ印象に残っているのは木村快さんが“少数派は理解されない”とおっしゃっていたことだ。「世界は多数派で成り立っている」という言葉があるくらいで、少数派は多数派に排他されるのが運命だとだれもが考えていると思う。しかし、弓場は少数派の考えを持ち、見事に自分の信念を貫いた。なかなかできないことだと思う。ESDはまさに現代において少数派なのではないか。ESDという観念がうちだされてきたが世界全体を見ればまだ少数派であり、多数派に負けている。しかし、もしESDという考えが多数派になっても、実現は厳しいのではないか。ESDは理念の教育であり、一人一人がしっかりとした理念を持つ力がなければならぬと思う。現代を見ていて、はたしてそんな力があるのだろうかと疑問を抱く。弓場のようなしっかりとした理念を持つ力があるだろうか。そして、持続可能な社会につなげていくことができるのだろうか。「現代に求められる大事なことは、自分の信念をつらぬくことだ。」木村快さんがおっしゃったこの言葉がすべてをあらわしていると感じた。

■学生2

今回の講演会で印象に残ったことは、日本文化とユバ農場の関係について、木村快さんの考える ESD についての2つのことである。

まず、日本文化とユバ農場の関係について。日本人は文化を守っていくという考えが希薄である。それは、日本人が同質文化圏の内部で暮らしているためである。ブラジルに移住した多くの日本人の考え方も同質であったため、ブラジル文化に同化していった。一方、アメリカやブラジルなどの多文化が混在する社会では文化的アイデンティティが相互理解の上で重要になる。

ユバ農場は日本人の農場であるが、文化的アイデンティティを持っている。それは、アメリカでの経験からの影響が強い。また、ブラジル農場ではユバ農場での日本文化の継承をブラジル文化の一部として受け入れることができる。日本ではこのように異文化を受け入れることはできない。

次に、木村快さんの考える ESD について。木村快さんは異文化共生なくして持続可能な開発は不可能という。ここで一つ疑問が残った。それは、ESD は環境のためのものなので、異文化共生は関係ないのではないか。この疑問は、1月21日の連続講演会での小川さんの「環境問題は人間どうしの問題」という言葉から自分なりの答えを見つけた。持続可能な開発を行っていくためには、一人だけではできず、多くの人の理解が必要である。異文化共生できれば少数派の意見も一つの考えとして受け入れられる。異文化共生が実現すれば、ESD の考えが開発社会にも受け入れられる。

■学生3

私はユバの現在の文化の継承について、ユバの人々が「滅びようだったら滅びたらいい」と考えているという話を聞いてとても驚いた。日本人は基本的に伝統文化を非常に重んじる人種だと思う。しかしユバは伝統を大事にしながらも、時代の流れに沿って自分たちのライフスタイルを変える柔軟さを持ち合わせているということはすごいことだと思った。これは移民としてブラジルで生活する上で必要だったのかもしれないなと思った。また、日系3世の人々が自分たちのアイデンティティを求めている活動をしていると聞き、確かに日系の国民としてのアイデンティティはどうなっているのだろうかと改めて考えさせられた。見た目は日本人、けれど文化は日本人というのは非常に難しいと思う。ブラジルに住んでいるうちはブラジル人としても日本人としても窮屈なく生活ができるのに、日本に来るとブラジル人としても日本人としても窮屈な思いをする現状があると思う。これは、日本人が他民族になかなか理解を示すことができないこと、ブラジル移民について知識が乏しすぎるのが原因だと思う。今回の講演を聞いて、移民という事実があったことをもっと知っていかななくてはいけないと感じた。

■学生4

アリアンサのような社会が形成された背景には、弓場家の思想があるということが分かった。新しい世界を見つめ、新しい思想を取り入れ、新しい社会を形成した結果がアリアンサなんだと思う。当時の世襲の中で新しい考え方を貫き通すのは難しいことであり、そういった意味でアリアンサが形成されたのは奇跡的だと思う。では、なぜアリアンサは奇跡的に形成されたのか。弓場家の強い意志があったと同時に、アリアンサの地が日本から遠く離れていることも影響していると思う。もし、日本国内でアリアンサのようなコミュニティを作ろうとしても、今も昔もできないと思う。いくら強い意志があっても、なかなか難しいことだと思う。だからこそ、生き残ったアリアンサの例から学ぶことは貴重なことだと思う。

改めて、「共生」とは何か考えると、ほかの文化と同化することではなく、自文化をなくすことなく他と同時に成り立つこと、だと思う。アリアンサは日系の文化をなくすことなく共生しているところに価値がある。

全四回の講演会を通じての感想

■学生1

あまりにも実生活とかけ離れた社会の話だったためにずっと戸惑いの連続だった。率直に言えば理解できない部分は多く、異文化理解の難しさを改めて思い知らされた。ESDの扱い内容として、異文化理解、多文化共生といったものが挙げられているが、どこまで理解できればESDの目標は達成されたといえるのだろうか。今回の4回の講演会の内容で、私自身は今まで触れることのなかった移民という問題に少なからず関心を持つことができた。アリアンサという文化が存在していることや日本からのブラジル移民が抱えているアイデンティティや文化の継承の困難があることはわかった。しかし、そこでの生活を受け入れることができるかどうかはわからないし、疑問に思っていることも多々ある。これを理解できたと言えるのだろうか。

4回の講座を通じて、異文化理解の難しさだけでなく、ESDのゴールが何なのか、教育を行うものとして、受けるものとしてどこまでの学びを求めなければならないのかという点にも困難があることがわかった。

■学生2

木村快さんからユバの話聞くまで、正直ESDの人間開発と社会開発が必要であるのかが懐疑的であった。環境を維持しながら社会も維持していくならば産業の技術レベルで改善を進めていけばよいという考えがあって、文化面はそのための二次的役割を果たす程度のものでしかないと思い込んでいた。しかし講座が回を重ねていくにしたがって、ユバでなぜ今でもこのような生活が続いているのかが、芸術という精神的支柱によってであることが理解できた。日本であれば、子どもたちはテレビゲームに夢中だったり、年配の方々は人によってさまざまではあるものの、どちらにしてもお金がなければできないことばかりであるし、現実していない。子どもたちも誰も悪いわけでもなく、誰かが責められなければいけないなどということはない。今の社会全体の意識と社会そのものが変革を求められていることが少しでもわかった気がした。

■学生3

今までの講演会を通して、ユバがどういうところで、どのような歴史をたどってきたのか、またどのような生活を送っているのかということがわかりました。自然とうまく共生する社会。今の日本とは違う暮らしを実現しているユバ農場にとっても興味を持ちました。ESD、持続可能な開発のための教育をするために、このユバというコミュニティはとても参考になるところが多いなと思いました。昔の日本の暮らしを継承しているユバ。この講演の中で、歴史を振り返り、戻ることが今の世の中には必要なのではないかと考えるようになりました。開発をすすめて、新しい世界を創り出していくのではなく、自然の中で自然から学び、自然と共に生きてきた昔のような生活に戻ること、持続可能な社会が築いていける

のではないのかなと思いました。私たちが暮らしやすくするために開発をする今の社会では、共生は難しいと感じました。私たちのことしか考えていないわけですから。この地球は私たち人間だけのものではないということをもう一度みんなが思い出し、自然から学ぶということ覚えなければいけないのではないかなと思いました。そうすれば、ESDの目指す方向へ進んでいけるのではないのでしょうか。

持続可能な開発のための教育。この講演会を通して、私の中での方向性が少しずつ見えてきたような気がします。私のこの考えをみんなに伝えられるように、もっと深く考えていきたいと思います。形ではなく心の連携が大事なのですから。

■学生4

まず、自分が知らない世界を教えていただいたことで、自分の視野や、考え方が広がったことがよかったと感じている点です。現代の日本社会では机上の空論といわれてしまいそのような理想的な世界を、日本人が外国に創り上げ、長い間ずっと継続しているという事実は驚きでした。

また、自分は日本人として誇りを持っていて、「外国とは違う」と、変な意識を持っていたように思います。頭では多文化共生が大事という意識があったものの、やはり、どこか他文化を受け入れようとはしていませんでした。しかし、講演会を通して、ESDは多文化共生無しには実現しえないということをお話していただきました。他を尊重し、違いを理解し、受け入れる姿勢が、グローバル化した社会の中で互いに協力して生きていくために必要であると感じました。

そうして一番感じたことは、真に豊か心なくして、真に豊かな社会は作れないということです。それは弓場農場の事例を知れば、誰もが納得することではないのでしょうか。自然・文化・協同性を大事にし、それらと上手く付き合っていくことで豊かな社会は実現できると思います。弓場農場のシステムをそのまま日本社会に適合することはできませんが、自然・文化・協同性の大切さを感謝の気持ちを持って考えられるようになれば、社会は変わると思います。そのように、価値観を変えていくための手伝いをすることがESDの大きな役割の一つであると考えます。